



LA NOUVELLE

N°15 AUTOMNE

東京外語協会

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10

本郷サテライト 東京外語協会付

発行責任者 藤倉洋一 (昭45)

2015.10.1 発行

第20回 仏友会総会

4月25日(土)恒例の仏友会総会が東京・大手町サンケイプラザで開催された。出席者は、現役学生4名を含めて総勢72名の盛況であった。

藤倉会長の挨拶、金澤副会長の会務報告の後、会計・監査報告の承認を得て、総会の部は滞りなく終了した。続いて、川口先生から母校の近況報告をいただいた。

講演会の部では、元日銀副総裁の藤原作弥氏(昭37)が登場され、「李香蘭の思い出」の演題で、終戦直後の満州におけるご苦労話や、逃げ遅れた現地の日本人難民が辿った悲惨な運命の秘話などが披露された。

休憩の合間に、伊藤勝郎さん(昭37)のご協力を得て、2グループに分かれ、出席者の記念撮影を行った。現役学生4名は、昨秋の外語祭のフランス語劇『とりかえばや』出演者代表の皆さん。続く懇親会では、赤白のフランスワインのグラスを手に、参加者たちは昔話に思いを馳せつつ、お互いの近況を語りながら、仏友会ならではの和やかな雰囲気を楽しんだ。今年の総会・懇親会は、特に若い世代の参加者も多く、伝統の継承に明るい兆しが見られた。

今回の講演内容を補足しつつ、藤原作弥氏から原稿を頂戴したので、以下に掲載させていただく。(幹事 中村日出男記)

李香蘭の思い出

藤原作弥 (昭37)

「仏友会」総会で、昨秋享年94歳で逝った李香蘭こと山口淑子さんについて講演をするよう依頼があり、喜んでお引き受けした。本年1月末、東京のホテルオークラで「お別れ会」を開催したあとも、多くのメディアが彼女の追悼報道を企画し、そのたびに付き合いさせられる機会が多かった。

なぜ私のような者が引っ張り出されたかといえば、約30年前に『李香蘭 私の半生』(新潮社)という自伝を共同執筆したことが縁である。共同執筆といっても単なる聞き書きではない。約2年間の質問に対し語った彼女の過去の半生について私が改めて取材・調査し、一人称形式で文章化する—という日本では稀有な伝記製作手法である。彼女の生地・撫順から終戦直後祖国叛逆罪の軍事法廷に立った上海まで戦前の彼女の中国における足跡を辿る旅行を二回・・・。

なぜ私という人間に執筆依頼してきたかは、彼女自身によれば、私も彼女と同じ満州で育った引揚者で、『満州、小国民の戦記』(新潮社)という自伝的ノンフィクションを読んで感じ入ったから、という。

・・・などと話していくと、あの日の講演と同様、テーマは「李



昭和41年卒までの出席者と現役学生

香蘭)その人からどんどん離れていくので、ここで忘れぬうちに彼女の生涯を短くまとめ記しておく。

満州・撫順で日本人両親の長女として生まれた淑子は頭脳明晰、成績優秀、和洋を問わず歌舞音曲に秀でた可憐な女の子だった。『美貌に罪あり』と言われるが、その美女が美声の持主であれば尚更のこと。少女時代、肺浸潤の治療のため帝政ロシアのモスクワ歌劇団から奉天に亡命してきたオペラ歌手マダム・ポドレンフからクラシック歌曲を学んだその天才が、奉天放送局に見出され、中国全土で大評判。父親の親友で義兄弟になった中国人から貰った名前「李香蘭」はやがて満映にスカウトされ、アジアの大映画スターとして独り歩きしていく。運命のいたずらである。

自伝を共同執筆中、国立フィルムセンター試写室で映画『支那の夜』など長谷川一夫と共演した“大陸三部作”を見終ると彼女は滄茫の涙を流し「私ってあんな映画に出ていたのね」と呟いた。そして近くのホテルのバーで飲みながら「私って何者だったの?」というアイデンティティ論が展開された。彼女は「私は日本と中国という祖国と母国を愛していたけれどその二つの国が戦っていた。北京の中国人子女だけの高等女学校に進学してからも、満映女優になってからも私はいつも何者?と自問していた」と述懐し、「アイデンティティってどういう意味?」と尋ねるのだった。

私は新聞記者だったので、アイデンティティとは自己同一、自己証明など学問的には難解な外来語だが、新聞記事に必要な条件〈5つのW〉を説明、WHO・WHAT・WHEN・WHERE・WHYの5つの疑問詞を自分に問い掛けて自らを見詰めること、ソクラテスの「汝自身を知れ」という教訓に等しい—などと答えてみた。

すると彼女は「そう、私、そのアイデンティティをわきまえなかったの、関東軍(=日本軍)に利用され、日本人山口淑子でありながら中国人李香蘭と偽って映画でも実生活でも演技し、敗戦直後、漢奸罪(祖国叛逆罪)で裁かれたのね」と嘆息するのだった。死刑を求刑されたが、日本人であることが証拠書類のアイデンティフィケーション・ペーパー(身分証明書=戸籍謄本)で証明され、無罪・国外追放となるまで—が、彼女の中国における半生である。

奉天郊外の満州事変(昭和6年)、北京郊外の日支事変(昭和12年)という日中戦争二大発火点という〈時〉と〈場所〉に居合わせた偶然は、彼女が「昭和史の申し子」といわれるゆえんである。戦後の彼女は、帰国後、日本のオペラ歌劇の舞台に立ったが、名声たる〈李香蘭〉のレッテルが大成は許さず、結局、東宝、松竹などの映画作品に出演、アメリカに移り、ハリウッド映画に出演し、ブロードウェイミュージカルの舞台に立つ最初の日本人となる。

雪之丞変化的な成長はまだしも、世界的な彫刻家イサム・ノグチとの結婚、外交官大鷹弘との再婚、チャップリン、ルーズベルト夫人らのリベラルな文化人との交遊関係からマッカーシー旋風の犠牲になり、帰国後はニュースキャスターとして外交ジャーナリストに転進、さらには国会議員へ・・・彼女は、李香蘭、潘淑華、シャーリー・ヤマグチ、ヨシコ・ノグチ、山口淑子、大鷹淑子、ジャミーラ=パレスチナ語で「可愛い人」などの名前が示すように七つもの人生を輪廻転生していくのである。そうした戦後の彼女の半生の活動に一貫していたのは、戦前の李香蘭時代における個人と国家のアイデンティティの喪失による過ちを教訓とし、「二度と戦争の悲劇を繰り返さない」という彼女自身の“キャンペーン”を責務として果たしたことだった。

—と、上記のようなストーリーを、外語「仏友会」で話した上、彼女との共通項である私の満州体験とそこから引き出される〈戦後70年〉を振り返り、日本の将来に向けた私なりの〈温故知新〉の持論を述べる計画だったが、現実の講演ではどうやら後者のウェイトに力が入り過ぎたようである。本会報誌を借りて補遺とさせて頂く次第である。



昭和43年卒以降の出席者と現役学生

第21回 サロン 仏友会のお知らせ 《講演とボジョレ・ヌヴォオを楽しむ会》

日時: 2015年11月21日(土) 午後2時~5時
会場: 本郷サテライト 3F・8F
会費: 3,000円

2015年分通信費(1,000円)も同時に受け付けます。

《講演》 午後2時~3時半

講師: 東野香代子氏(昭和57年卒)

ファッションビジネス研究所(株)代表取締役

演題: 「知られざるファッションビジネスの世界」(仮題)



Hermès Japonが設立されたのは1984年。氏は、設立と同時に同社に入社し、約20年勤務の経験を持つ。広報部長も務めた。そのキャリアの経験を踏まえ、フランスと日本を中心に、ファッションビジネスの厳しくも華やかな世界を分かりやすく楽しく語っていただきます。男性会員にもお勧めです。

《ワイン・パーティ》 午後3時半~5時

個別通知: 10月半ばに、メルアド登録の会員にはE-mailで、その他の登録会員には往復はがきでご案内します。申し込み切は11月11日。

連絡先: 藤倉洋一(昭45)

fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp

Tel/Fax 048-822-4540

勝亦杏子(昭46)

anzuko@k08.itscom.net



岩崎力先生のお仕事

及川直志(昭45)

岩崎力先生が享年83歳をもって他界されました。この場をお借りして、心からご冥福をお祈り申し上げます。

在学中は、学生運動による長期ロックアウトという当時の状況もあって、先生のお話を直接うかがう機会はほとんどありませんでしたが、勤務先の白水社でわずかながら仕事を一緒にする機会に恵まれ、温かなお人柄に触れることができました。実に幸せなことだと思っています。

もう30年ほど前になるでしょうか、当時京都大学に籍を置かれていた日本文学研究者イヴ=マリ・アリュエ氏が東京に来られた際、岩崎先生がかつてアリュエ氏に日本語をお教えになったという縁もあったので、神保町は伝説の飲み屋「弓月」にお二人をお招きして一席を設けたことがあります。話が尽きないまま酔いにも任せ、アリュエ氏の投宿先である九段のホテルの一室に(恐らく無理矢理)先生をお連れして飲み明かしたのですが、何を話したかは覚えていません。明け方の光の中の、先生の穏やかな笑顔だけが記憶に残っています。

岩崎先生は数々の名訳を残されましたが、特筆すべきは『黒の過程』を初めとするマルグリット・ユルスナールの諸作品でしょう。雑誌『フランス』に、親交も厚かった作家の思い出を綴る美しい文章を連載していただいたこともあります。

白水社での最後のお仕事となったのもユルスナールでした。自伝的三部作<世界の迷路>の第1巻『追悼のしおり』(2011年刊)です。先月、芥川賞作家としてご活躍中の堀江敏幸氏

による第3巻『なにが?永遠が』が刊行され、完結しましたが、岩崎先生は堀江氏がユルスナールとラルポーを通じて若い頃から師事した人でした。校正のさなかに先生の訃報を受けた氏は、「一言一句たりともおそろかになかった」先生に対して恥ずかしくないものにしたいと、「白水社さんには申し訳ないが」と遅れを詫言いつつ執念とも言える推敲を重ねられました。1巻が岩崎力、2巻に小倉孝誠、そして3巻は堀江敏幸という、錚々たる訳者を得たこの三部作は、フランス文学翻訳史において後々まで記憶されることになるでしょう。

岩崎先生の静謐な文章は、言葉をひとつひとつ確かめるようなあの静かなお話ぶりそのままではないだろうかと思えます。耳をすませば、そこには先生のお声が残っているのです。(株式会社白水社代表取締役社長)

◎1994年まで教鞭を執られた岩崎先生が本年4月10日に逝去されましたことを謹んでお知らせ致します。

◎シンポジウム「岩崎力の仕事—終わりなき言葉、終わりなき生」が予定されています。|| 日時: 12月6日(日) 14時~18時 | 場所: 東京外国語大学府中キャンパス、アゴラグローバルホール | 主催: 東京外国語大学総合文化研究所 | 後援: 白水社 | 協賛: プルースト研究会 | 開会の辞: 和田忠彦 | 講演: 堀江敏幸 | 思い出のひとつ: 西永良成・小口未散 | ターブルロンド: 小倉孝誠・澤田直・中野知律・堀江敏幸(司会: 松浦寿夫) | 入場無料・予約不要 | 東京外国語大学のホームページ <http://www.tufs.ac.jp> の「イベント情報」参照。

《パリ便り》

グランゼコールの現場で奮闘中！

花崎真夕（平 25）

2013年4月仏語の専門職員として外務省に入省しました。専門職員は、総合職員（旧1種）に比べて外国勤務が長く、特定の言語と地域の社会・文化・歴史等に通じた専門家となるのが期待されます。入省後1年間は、霞が関の、日本語・日本文化を世界に発信する文化交流・海外広報課で勤務し、2014年7月から2年間、在外研修としてパリ高等師範学校に留学しています。外務省からの留学は、ENA やシアンスポが多いのですが、私は、国際関係や政治だけでなく文学・歴史・哲学なども幅広く学んで、将来付き合っていくフランス人エリートと対等に話せるような知識を得たいと思ったため、様々な学部のある本学を選択しました。

高等師範学校は、パリ5区にあり、1794年設立、文理合わせて1学年200人弱という少数精鋭のグランゼコールです。学生は、バカロレアを取得後、2年のグランゼコール準備学級を経て競争率の高い選抜試験を受けて入学し、準公務員として給料をもらいつつ4年間学校で学び、その後6年間は国家のため（教員や研究者が多い）に働くことが期待されます。

私は、留学生として大使館勤務もなく、主に歴史学部の授業に出席し、古代ギリシャ史、ビザンツ帝国史、仏中世史、第1次・

第2次世界大戦史等を学んでいます。授業のレベルは、グランゼコール準備学級でギリシャ語・ラテン語・仏史、発表の仕方等をみっちり学習したことを前提に行われるため非常に高く、私にとっては友達のノートなしではなかなか難しい状況です。また、文系の学生と話していると、日常会話でも文学作品や歴代大統領の講演からの引用があり、理解に苦しむこともあるため、仏文化の源となっているギリシャ神話や古代ローマ伝説と、よく引用される17世紀3大劇作家やボードレール等も読み始めました。外大時代は言語学専攻でしたが、文学や歴史の授業のノートを取り出して復習することもよくあり、外大でフランスに関して幅広い分野の授業を受けられたことに感謝しています。

学校の特徴として、勉強の他にも、イベントやサークル活動が非常に充実していることが挙げられます。国内に4つある高等師範学校対抗競技大会、文化祭、旅行、各学部企画のパーティーを始めとしたイベントが毎週のようにあり、学生の勉強と遊びとの切り替えの上手さに驚かされています。私も、難しい授業の後には劣等感に襲われることがよくありますが、所属しているダンスサークルで踊ったり、友達と話すことで心をリセットしたりするようにしています。学校外でも、週末にはサークルの友達と、他の学校で行われる舞踏会や市民団体がセーヌ川岸等で開催するダンスイベントに行くことが多いのですが、参加者の年齢層が幅広いため、他の大学・グランゼコールの学生だけでなく自分の両親・祖父母世代の方とも知り合うことができ、

仲良くなって一緒に飲みに行ったり、家に招待してもらったりして交友の輪を広げることができ、非常に面白いです。

留学前は、高等師範学校の学生はエリートだから気難しく高慢で付き合いにくいかなと心配していましたが、学校全体の雰囲気は非常に良く、学生も自分の関心のある分野を情熱を持って研究している、という感じで、私が勉強で困っていると、彼らから進んで熱心に助言や解説をしてくれます。ただ、1年経って気付いたのは、学校に移民出身の学生は数人しかおらず、大半の学生はパリの優秀なグランゼコール準備学級を出ていて、親も教師か優秀なグランゼコール出身が多いため、世間でも批判されているように、仏教育制度は見かけほど公平でなく、個人の努力による社会上昇の仕組みはあまり機能していない、ということです。

このような恵まれた環境の中で勉強できる機会があと1年与えられていますが、引き続き、仏語だけでなく、将来のフランス人指導者と対等に話せるような教養を身に付け、今後の海外勤務に役立てられるように頑張りたいと思います。



友人と「パリジェンヌのための舞踏会」にて

25年ぶりの再会

宮本真紀子（平 2）

「もしもし、久しぶり！卒業25周年の祝賀会に一緒に出てみない？」Tさんからの1本の電話がきっかけで、元同級生4人は実に25年ぶりの再会を果たしました。

在学中の80年代後半、時はまさにバブル真っ盛りでしたが、西ヶ原で過ごす私達には世間の狂騒はどこか遠くの出来事でした。

多くの授業の中でも印象深いのが、篠田先生による「抽象美術概論」のテキスト講読です。日本語でも理解不能な内容を原語で読みそれを要約して発表する…。自分の語学力の無さや教養の浅さが情けなく、教室の片隅で小さくなっていったのを思い出します。

卒業後は女性が長く働ける職場なのではと百貨店を就職先を選びました。ここで（語学力は心もとなかったにもかかわらず）欧州からの商品買付やパリ店出店といった仕事に携わる機会を得たのも「外語卒」であったおかげだと思っています。その後は行政書士として独立し、外国人のビザ申請業務を中心に取り扱うこととなりました。これも、3年生の夏に初めて訪れたパリで多様な民族が共存する街の様子に興味を惹かれたこと、その後フランスの移民問題をテーマとした授業に卒業まで熱心に出席したこと、どこかで繋がっているようにも思います。フランス語を学ぶことは、その先に広がる様々な未知の世界への入口であること…。それを実感できるようになったのも、25年を経た今だからなのかもしれません。

4人の出席者の中には飛行機で半日かけて駆けつけてくれた人もいました。総会終了後も話は尽きることがなく、次の再会がまた25年後にならないようにしようね（笑）！と約束しながら、それぞれの帰途へとついたのでした。



卒業50年を迎えて

清水良雄（昭 40）

去る6月27日に開催された東京外語会総会で卒業50周年・25周年の慶祝行事の実行委員長を勤めさせて頂いた経緯より、今回LA NOUVELLEに寄稿することになりました。

今年の50周年慶祝対象者は358名、25周年は730名の合計1,088名で、当日慶祝行事は立石学長、長谷川東京外語会理事長ご臨席の下、府中キャンパスのプロメテウスホールにて行われ、50周年組64名、25周年組55名の合計119名の参加がありました。出席者数は昨年とほぼ同様ですが、卒業生で住所不明者が数多く、事務局の熱心な調査にも関わらず50周年組の15%、25周年組の34%の方とは連絡が取れませんでした。一旦卒業してしまうと絆を維持して行く大変さを実感した次第で、特に若手の方はまだ社会の現役でもあり難しい面を痛感致しました。

因みに50周年組のフランス科は入学時40名でしたが、現在に至るまで、年一回程度の有志の旅行会（これまでブルゴーニュ運河巡り等）並びに食事会を催したりして、旧交を温めております。

さて、大学卒業後半世紀が経った訳で、また今年は丁度戦後70周年の節目に当たります。我々は戦中世代ではありませんが、終戦直後の混乱と窮乏生活を体験しており、その後の高度経済成長期から、石油危機更にはバブル経済とその破綻を経験して参りました。その間長かったと思う人もありましようが、あつと言う間の50年と今更ながら感慨にふけています。思えば50数年前、東京外国語大学に青春の様々な思いを持って入学し、西ヶ原のオンボロ木造校舎で机を並べて、自由気ままに学生生活を送ったその数年間がその後の人生の方向を決めるとは当時



昔日の青春 佛友會々報

80年のタイムカプセルを開ける 10

坂井英俊（昭 40）

昭和9年刊への滝村立太郎先生の寄稿は続く。<元旦、目出度き皇太子殿下（今上）の初春である。ここでも驚かされたのはかかる真夜中に参詣者の群列をなしてゐることである。伊勢（伊勢神宮）といひ、代々木（明治神宮）といひ絶えず参詣者のあることを思ふと、私は自分の恥かしさをここに、諸君の前に披瀝して今後できるだけ頻繁に神詣をすることを誓ふ>やはりどこか謎めいた言葉である。国連脱退・三陸大地震・神兵隊クーデタ発覚・滝川事件などが続き、軍部の思想言論統制はますます苛酷になっていた。巷には「島の娘」「サーカスの唄」が流れ、小唄勝太郎の「東京音頭」が全国の盆踊りを湧かして、わが仏友会の総会でも高唱されたという。我々民衆は暗い時代ほどことさらに熱狂娯楽を誇示するものらしい。皇太子が前年の暮れに誕生していたなら大みそかの深夜が参拝客で賑わうのは古来当然のことなのだが、なぜかそれに「驚かされた」という。さらに「自分の恥かしさをここに、諸君の前に披瀝して今後頻繁に参詣することを誓ふ」と念入りにいう。学者の意地として「世間知らず」のポーズをみせたのか意地を詫びに替えてみせる不本意が「恥づかし」だったのであろうか。まるで踏絵をふんで無理に笑うキリシタンのもあり先生は「驚き・恥じて」いるばかりで、自発的な考えや意見は一切踏さず、低次元の傍

観者という立場をいささかも崩していない。

軍部と世間とが、言語のすみずみまでを占領支配していたのだろうか。ひたすら「謝り反省する」のは、先生の精一杯の皮肉・抵抗だったのか、真意は不明である。が、その三年後には銀座のネオンの全てが消え、「もの言えは唇寒き」闇の時代へと日本は沈没してゆく。国を信じて従う国民の多くは、やがて「全軍特攻」という前代未聞・責任不在の生き地獄へ案内されることになるのだが、さすがにそれを予測することは当時の誰にもできなかった。

世界的大恐慌、赤貧洗うがごとき飢餓の時代。「大東亜共栄圏」「王道楽土」「五族共和」と政府が描いた餅の絵にも貧しい国民はすがりついた。娘を売らねば生きられぬほどに飢えた民衆は「楽土満州」の夢に感激し、国を挙げての好戦気分はいっそう熱をおびていく。また日露戦争以来「家族や許婚者らの戦死を犬死と貶めるような反戦や敗戦だけは許せない」と、仇討が執念となり「社会の木鐸」たる誇りを捨てたお調子者の新聞・ラジオが美化する「聖戦勝利・名誉の戦死」は、唯一絶対の「国民常識」となって燃え上がった。わずかでもそれに水をさす者は「非国民」・裏切り者として隣人・近所からは蔑視・敵視され、時には「特高」に逮捕され残忍な拷問も加えられた。戦争は、もはや制動不能となっていった。

「一撃講和」が山本大将の基本戦略だったというのが、相手が弱小場合の「弱い者いじめ」ならそれも有効だが（聡明な大将が熟知のように）経済力が百倍とさえされた恐竜のよう

な相手をいきなり蹴り上げてから勝手な条件で和を求めれば相手が黙って応じると、本気で考えたのだろうか。それが310万人を犠牲にした帝国の一大戦略だったのだろうか。「開戦やむなし」と思い詰めた日本の苦悩はもっともであるが、自信過剰になった軍部と好戦派国民は欧米を甘くみて、今の大国同様、平和どころか国益確保のみに血眼となった。健康な中学生部隊（沖縄戦の護郷隊1000名）は「十人殺したら死んでもいい」と、痩せこけた肩に手製爆弾を負わされ、油照りの中へ突撃、血と泥の地獄で焼き殺され戦車に潰されながら、いじらしくも「天皇陛下万歳」と言って果てたという。「尽忠報国・天佑神助」の呪文を唱えながら、国中が奇怪・凄惨な軍事カルト集団化していったともいえる。たしかに日本兵ほどに勇猛果敢・不撓不屈な戦士は世界にまれであったろうが、それだけに「自ら進んで」散っていった多くの国家英雄や、家族を思って泣きながら絶命したであろう貧しい若者らの胸の内を思えばあまりに切なくいたましく、現代の我々からは、かける言葉すらない。

そんななか、半狂乱の妨害・包囲をかいくぐり万感の思いをこめて「玉音放送」を決行した昭和天皇の至誠・豪胆が、最後に<国をきちんと敗北させた>ことで、軍民好戦派らに呪縛されてきた日本国民の心を、遅まきながら「解放」したのであった。今日では理由の如何を問わず戦争を好む者こそが憲法違反の「新・非国民」であろう。日本がいつか人道国家として歴史の隅に輝くならば、そのとき初めて310万の霊をお慰めできるのかもしれない。（次回へつづく）